思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究

分担研究者 首 藤 敏 元
(埼玉大学教育学部助教授)

研究要旨 本研究は、家庭内の人間関係と、幼児の思いやりおよび正義感の発達との関連を検討することを目的とした。研究1では、親子間と夫婦間での共感経験から家族関係をとらえ、家族の感情交流が育児場面、会話場面、子どもの愛着行動などの家庭生活の様々な局面と関連することを報告した。そして、それぞれの家庭には感情的な雰囲気が存在し、家族の共感関係を把握することにより、その感情的な風土をとらえ得ることを示した。研究2では、幼児の思いやりと正義感を自己制御された対人行動と見なし、それを保育者の観察を通して測定した。親子の共感関係と親のしつけの態度は、主に幼児の自己抑制的な協調的行動と関連していた。また、男子にとって、父親の共感と自己制御のしつけが重要になることを示した。

■ 研究目的

幼児期の子どもは、自己意識と対人関係の発達とともに、共感、罪障感、優越感、正義感などの複雑な情緒を表出するようになる。このような社会的情緒は、子どもが人との関係の中で社会化し個性化していく上で重要な要素となる。近年、青少年の非行や規範意識の低下、心理的な問題が顕著になり、乳幼児期からの基本的情緒の形成が重要視されてきた。特に、相手の心情を想像し自己の行動を制御しようとする動機づけと能力、相手の気持ちを共有し相手を思いやる心、人の身体や心を傷つけてはいけないといった基礎的な道徳観、利己的な行動を抑制する公正観などを幼児期から育成することの重要性がさまざまな形で強調されている。

思いやりとは、相手の気持ちや欲求を理解し、自分よりも相手を優先させようとする心情や行動である。思いやりには、相手の心情や要求に影響され、自分の欲求を抑え相手の利益になるように振舞う“自己抑制的”な側面と、相手の要求を優先させて相手の利益につながる行動を積極的に表現しようとする“自己主張的”な側面とがある(首藤、1995)。思いやりは無意識的なものではなく、自己によって意識的に制御された行動である。

正義感と公正感は道徳的概念のひとつである。幼児期には、「ずるい」という表現に代表されるように、他者の利己的な行動に対する反発の形で表出されることが多い。このような素朴ながらも正当な自己主張は、仲間やきょうだいとの遊び場面で見ることができ、幼児に利己的な要求の衝突を解決する機会を提供する。素朴な正当性の主張は、他者とのやりとりを通して、成熟した道徳的概念へと発達していく。

思いやりは自己が他者(集団)に近づく親密化の過程を含むのに対し、正義感は自己と他者の分離の過程を含んでいる。これら2つの心理的な過程は、仲間同士のいざこざとその解決に見られるように、幼児が他者と協調的な関係を作り上げていく過程で同時に見られるものであり、人間発達の中心的な軸となるものである。

従来から、思いやりの発達には幼少期に思いやりを受ける経験、つまり親から愛される経験と、自分の心情とは異なる他者の心情を代理的に経験する共感経験や視点取得経験が必要条件になることが指摘されてきた。また、子どもの正義感の形成には、子どもの心情を汲み取りながら社会的規範を子どもに提示したり考えさせたりする誘導的しつけが効果的であることが示されてきた。しかし、今までの研究は養育者としての母親のみに焦点を当てており、幼児の思いやりと正義感の発達を母子関係の中でのみ問題にしてきたといえよう。首藤(1997)は、家庭を幼児の思いやりの発達環境としてみた場合、親の性格特性としての共感を問題とするのではなく、母子間と父子間、および夫婦間を含めた家族間での感情交流として共感をとらえる必要性を提案した。そして、家族の共感関係に基づいて、家族関係の質を測定する可能性を検討した。家族の共感関係に関する研究はまだ始まったばかりであり、測定の妥当性の検討や様々な家族要因

表1　家族共感に関する尺度と質問項目

A．親子間（母子間および父子間）の共感経験

尺度名	α係数	質問項目
共有	母子間 .749 父子間 .748	子どもと気持ちがひとつになっていると感じたことがある。
		泣いている子どもを見て、自分まで悲しくなってきたことがある。
		子どもを叱ったあと、子どもがどんな気持ちになったかを想像したことがある。
		子どもが病気の時つらそうにしているのを見て、自分までつらい気持ちになったことがある。
		子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなったことがある。
		子どもの話や表情から、子どもの気持ちを感じとろうとしたことがある。
		子どもにプレゼントを買う時、子どもの喜んだ顔を想像しながら選んだことがある。
		子どもの喜んでいる様子を見て、自分までうきうきしてきたことがある。
分離	母子間 .667 父子間 .668	子どもと言葉やしぐさでやりとりするのが、めんどうになったことがある。
		子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある。
		子どもが泣いていた時、その気持ちをわかろうとしたが、なぜ泣くほどに悲しいのか理解できなかったことがある。
		子どもが「これはおもしろい」と言葉やしぐさで伝えてきても、自分は興味を持てなかったことがある。
		子どもが何かを恐がっていた時、その気持ちをわかろうとしても、自分までその恐さを感じなかったことがある。

B．夫婦間（妻から見た夫婦間および夫から見た夫婦間）の共感経験

尺度名	α係数	質問項目
共有	妻 .782 夫 .749	夫(妻)と気持ちがひとつになっていると感じたことがある。
		夫(妻)がとても疲れているのを見た時、なんとかしてあげたくなったことがある。
		夫(妻)がつらそうにしているのを見た時、自分まで苦しくなったことがある。
		夫(妻)のしぐさや行動から、夫(妻)の気持ちを感じとろうとしたことがある。
		夫(妻)が仕事(仕事や子育て)などでの喜びや感動を話すのを聞いて、自分までハッピーな気持ちになったことがある。
		夫(妻)のプレゼントを買う時、夫(妻)の喜んだ顔を想像しながら選んだことがある。
		自分の言動から夫(妻)がどんな気持ちになったかを想像したことがある。
分離	妻 .667 夫 .667	夫(妻)の気持ちを深く理解しようとしたが、どうしても理解できなかったことがある。
		夫(妻)がつらそうにしていた時、その気持ちを感じとろうとしたが、ピンとこなかったことがある。
		夫(妻)が何かで悩んでいた時、その気持ちをわかろうとしたが、深く理解できなかったことがある。
		夫(妻)の話を聞くのがめんどうになったことがある。
		夫(妻)が楽しい気分でいた時、楽しくなる気持ちは理解できても、自分は夫(妻)のように楽しくならなかったことがある。

との関連性などをさらに追究することが必要である。

思いやりも正義感も対人関係の中で獲得される。親が単にやさしくすれば思いやりが育つのではなく、逆に厳しく接すれば正義感が獲得されるのでもない。本研究は、家庭内のどのような人間関係が幼児の思いやりと正義感の発達に必要なのかを明らかにしようとする。特に、家族の感情交流としての共感経験を中心に検討を加える。

■ 研究 1

1．目 的

首藤（1997）は、母子間、父子間、夫婦間での感情の交流（共感関係）から家族関係の質を測定し、親としての発達との関連を検討した。母親（妻）の成長感は夫婦関係のよさに関する要因が強く影響し、父親（夫）の成長感では親子関係のよさに関する要因の影響が強かった。研究1は先行研究の成果を踏まえ、両親の育児感情や子どもの愛着行動など、様々な家族要因と共感関係との関連性を調査し、家族の共感関係に関する知見を広げることを目的とする。これは、家族の共感関係の測定の妥当性を検討することにつながる。

2．方 法

1）調査協力者

埼玉県大宮市の4つの公立保育所と越谷市の私立幼稚園1園に子どもの通う保護者が調査に協力した。調査用の冊子は母親用と父親用を1セットとし、保育所に300部、幼稚園に300部配付した。回収率は保育所158部（52.7%）、幼稚園175部（58.3%）であった。保育所の場合、月齢42ヶ月以上の幼児を対象に配付し、幼保で幼児の月齢に差が出ないように配慮した。一人親家庭からも回収があったが、今回の分析には含めなかった。

回収のあった家庭の幼児の平均月齢は保育所で62ヶ月、幼稚園で63ヶ月であった。幼保による性別の分布は同質であった。母親の平均年齢は保育所では34.4歳、幼稚園では34.2歳、父親の平均年齢は保育所では36.8歳、幼稚園では36.5歳、平均結婚年数は保育所9.6年、幼稚園8.8年であった。

回答用紙には欠損値があるため、分析の対象者数は回収部数とは一致しない。

2）調査項目

質問票はフェイスシートに続き、以下の尺度に関する項目から構成されていた。母親用と父親用の質問票は全く同一の内容であった。

①家族の共感関係

首藤（1997）は、共感経験が、親子間であっても夫婦間であっても、および母親（妻）から見ても父親（夫）から見ても、共有体験と分離体験という2つの因子から構成されることを見出した。この結果に基づき、親子間での共有体験8項目と分離体験5項目の計13項目が親子間共感の項目として用いられた。また、夫婦間での共有体験7項目と分離体

表2　親の育児感情に関する尺度と質問項目

尺度名	α係数	質問項目
充実感	母親 .645 父親 .755	子どもと遊ぶのが楽しい。
		子どもの成長する様子をほほえましく思う。
		子育てを通して、友だちが増えた。
		子育てを通して、自分が成長していると感じる。
		子どもと接していると、何とも表現できない充実感を感じる。
		子どもについて夫婦で話し合い、協力することが多くなった。
		親になれてよかったと思う。
		自分の子どもが一番かわいい。
		子育てを通して、自分の親を尊敬できるようになった。
不安感	母親 .790 父親 .695	子どもから解放されたい、子育てを誰かにかわってもらいたいと思う。
		よその子どもに比べて自分の子どもは育てにくいと思う。
		子どもの相手をすると疲れてくる。
		子どものことがわずらわしくてイライラする。
		子どもと接していると、自分の性格が嫌いになる。
		しつけのことなどで、どうしてよいかわからなくなることがある。
		私には子どもを育てる自信が持てないと感じる。
		子どもの悪い面は私のせいだと思う。
		子どもがいるために、自分のやりたいことをがまんしている。

表3　子どもの愛着行動に関する尺度と質問項目

尺度名	α係数	質問項目
安定	母親 .700 父親 .750	あなたから絵本を読んでもらったり、遊んでもらったりすることを好む。
		怖いときや悲しい時、病気の時やけがをした時には、あなたの側にいたがる。
		あなたと相談して約束（ルール）を決めることができる。
		あなたに抱きついたり、おんぶしてもらったりするような、あなたとの体がふれ合う遊びを好む。
		あなたのいろいろな行動や物の扱い方をまねる。
		絵を見せたり、「こんなこともできるんだ」とやってみせたりして、あなたに認めてもらうことを喜ぶ。
		自分で見つけた物や面白いことをあなたに話したがる。
		あなたと一緒にいても、一人で遊ぶことが多く、感情をあまり表に出さない。
不安定依存	母親 .654 父親 .516	あなたにべったり甘えてきて、赤ん坊のように手のかかることがある。
		あなたがどこへ行く時にも、ついて行きたがる。
		自分でできることも、あなたが手伝わなければやろうとしない。
		慣れない場所や知らない人の前では、あなたから離れようとしない。
不安定抵抗	母親 .621 父親 .606	いったん機嫌が悪くなると、あなたがなだめてもなかなかおさまらない。
		あなたに叱られた時に、あなたに怒りをぶつけたり、反抗したりする。
		あなたにしかられるようなことをわざとする。

表4　家庭内コミュニケーションに関する尺度と質問項目

尺度名	α係数	質問項目
家族間	妻 .702 夫 .772	起床時・就寝時のあいさつ(「おはよう」や「おやすみ」など)。あなたは、 外出時・帰宅時のあいさつ(「いってきます」、「いってらっしゃい」、「ただいま」、「おかえりなさい」など)。あなたは、 食事の時のあいさつ(「いただきます」、「ごちそうさま」など)。あなたは、 食事がおいしい時(「おいしい」、「うまい」など)。あなたは、 手伝ってもらった時(「ありがとう」など)。あなたは、 失敗したり、迷惑をかけた時(「ごめんなさい」など)。あなたは、
夫婦間	妻 .807 夫 .791	一日の出来事について。あなたは夫(妻)に、 世の中のいろいろな出来事について。あなたは夫(妻)と、 子どもの話題について。あなたは夫(妻)に、 心配ごとがある時。あなたは夫(妻)に、 あなたが体調の悪いときや、気分のすぐれない時。夫(妻)は、 あなたが病気の時。夫(妻)は、 あなたが疲れている時。夫(妻)は、 髪型を変えたり、新しい洋服を着たりした時。夫は、(仕事がうまくいってうれしい時。妻は)

※各質問文には、コミュニケーションの程度もしくは夫(妻)に対する配慮や気づかいの程度に応じた3段階の選択肢が続く。

表5　第一子誕生までの育児経験家庭内コミュニケーションに関する尺度と質問項目

中学高校時代	高校卒業後、第一子誕生まで	質問項目
母親 .928 父親 .892	母親 .936 父親 .886	抱っこしたことがある。 寝かしつけたことがある。 ミルクをあげたことがある。 おむつを替えたことがある。 一緒に遊んだことがある。

験5項目の計12項目が夫婦間共感の項目として用いられた。各因子に対応した項目の数は原尺度(首藤、1997)での項目数の割合と一致している。回答者は各質問に「全く経験しない」から「いつもある」までの6段階で評定した。具体的な質問項目は表1に示されている。

②親の育児感情

首藤・馬場・鈴木(1993)の育児感情尺度に基づき、育児の喜びや育児を通した自己の成長感および生活の充実感に関する9項目と、育児不安やストレスに関連した9項目の計18項目が用いられた。「全く感じない」から「いつも感じている」までの4段階評定が用いられた。表2は具体的な質問項目を示している。

③子どもの愛着行動

愛着のQ技法の項目と首藤・利根川(1994)による幼児の愛着スタイル尺度に基づき、安定愛着に関する8項目、不安定抵抗に関する3項目、不安定依存に関する4項目の計15項目が用いられた(表3)。「めったに見られない」から「たいていそうである」までの5段階評定であった。

④家庭内コミュニケーション

共感によって共有された家族の心情は、言葉や態度を通して相手に伝えられることによって、家族の感情交流として機能する。そこで、家族との日常的な会話の程度と夫婦間での心情のやりとりの程度を家庭内コミュニケーションとしてとらえようとした。家族間での会話の程度に関する項目と、夫婦間における自分の気持ちの伝達の程度、および自分の心情に対する相手の気づかいの程度に関する項目の計17項目が設定された。表4は、項目分析の結果残った14項目を示している。それぞれの質問文には、文脈に沿った3段階の選択肢が用意されていた。例えば、質問文「子どもの問題について、あなたは夫(妻)に」－選択肢「ア. ほとんど話さない、イ. 時々話す、ウ. 毎日のように話す」、質問文「食事がおいしいとき、あなたは『おいしい』と」－選択肢「ア. ほとんど言わない、イ. 言ったり言わなかったり、ウ. 必ず言う」。

⑤第一子誕生までの育児経験

表5に示されているように、第一子誕生までの

期間を「中学・高校時代」と「高校卒業後第一子誕生まで」の2つの時期に分け、それぞれの期間での育児経験を5項目から測定した。回答形式は「ない」から「多い」までの4段階であった。

3）手続き

保護者への質問票は保育所を通して配付され、約10日後に回収された。回収の際、プライバシー保護の目的から、母親用と父親用の質問票を別々の封筒にのり付けをして回収できるような配慮がなされた。

3．結果と考察

1）尺度の構成と父母（夫婦）間の差異

①.家族共感

「全く経験しない」を1点、「いつもある」を6点とし、主因子法による因子分析を行った。その結果、母子間共感、父子間共感、妻および夫から見た夫婦間共感とも、首藤（1997）と同一の2つの因子（共有と分離）が見出された。各因子に対応した項目の得点の平均値を尺度得点とした。尺度を作成するにあたり、クロンバックのα係数を計算した。表1にあるように、尺度ごとの内部一貫性は十分高いことが示された。

表6は尺度得点の平均値と標準偏差を示している。母親と父親は、子どもの心情に対し分離経験よりも共有経験を強く感じていた。また、妻も夫も相手との違いを意識するよりも相手の心情を共有する方が強いことを示している。父母および夫婦の差異を検定すると、親子においても夫婦においても、分離経験は父親（夫）の方が強いことが示された。親子間の場合、共有経験は母親の方が強かった。

②育児感情

「全く感じない」を1点、「いつも感じている」を

表6　各尺度の平均値と標準偏差、および母親と父親（妻と夫）の差異

尺度		母親（妻） 平均値	母親（妻） 標準偏差	父親（夫） 平均値	父親（夫） 標準偏差	対応のある t 検定の結果	
親子間共感 1点～6点	共有 n=310	4.87	(0.56)	4.60	(0.66)	母＞父	***
	分離 n=307	3.32	(0.76)	3.45	(0.75)	母＜父	*
夫婦間共感 1点～6点	共有 n=307	4.25	(0.78)	4.32	(0.77)		n.s.
	分離 n=307	3.20	(0.82)	3.41	(0.81)	妻＜夫	***
育児感情 1点～4点	充実感 n=309	3.39	(0.34)	3.16	(0.43)	母＞父	***
	不安感 n=312	2.49	(0.80)	2.18	(0.43)	母＞父	***
愛着行動 1点～5点	安定 n=312	4.24	(0.51)	3.85	(0.62)	母＞父	***
	依存 n=313	2.89	(0.88)	2.90	(0.78)		n.s.
	抵抗 n=310	2.75	(0.92)	2.67	(0.92)		n.s.
家庭内コミュニケーション 1点～3点	家族間 n=308	2.74	(0.29)	2.53	(0.41)	母＞父	***
	夫婦間 n=304	2.36	(0.41)	2.21	(0.42)	妻＞夫	***
第一子誕生までの育児経験 1点～4点	中学高校 n=302	1.63	(0.82)	1.50	(0.68)	母＞父	*
	誕生まで n=305	1.99	(0.95)	1.65	(0.69)	母＞父	***

* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

4点と得点化し、18項目を主因子法による因子分析にかけた。その結果、母親と父親の両方において、想定された2つの因子（充実感と不安感）が見出された。各因子に対応する項目得点の平均値を尺度得点とした。表2に示されているように、各尺度の内部一貫性は十分高かった。

表6の平均値から、母親も父親も不安感よりも充実感の方を強く感じていること、および育児感情はプラスの側面もマイナスの側面も母親の方が強いことが示された。

③愛着行動

「めったに見られない」を1点、「たいていそうである」を5点と得点化し、主因子法による因子分析の結果、母子間と父子間の愛着行動の両方において、予め想定された3つの因子（安定、依存、抵抗）が見出された。各因子に対応する項目得点の平均値を尺度得点とした。α係数は概ね満足のいくものであったが、父子間での不安定な愛着行動の尺度において、若干低くなる傾向（.5から.6程度）も認められた。

子どもは、母親に対しても父親に対しても、安定した愛着行動をとることが多い（表6）。また、父親よりも母親に対して安定した行動を示すことが多い。別の見方をすれば、母親も父親も子どもの安定した愛着行動を強く意識していた。母親は父親よりも子どもの安定愛着を強く意識していた。

④家庭内コミュニケーション

会話や気づかいの少ないことを示す選択肢を1

表7　親子間共感と夫婦間共感の相関

n=302

		妻から見た夫婦間共感			
		共有		分離	
母子間共感	共有	.421	***	-.102	
	分離	.009		.336	***

n=308

		夫から見た夫婦間共感			
		共有		分離	
父子間共感	共有	.650	***	-.273	***
	分離	-.151	**	.415	***

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

表8　家族共感と他の家族要因との相関

n=285		母子間共感				妻から見た夫婦間共感			
		共有		分離		共有		分離	
育児感情	充実感	.358	***	-.268	***	.396	***	-.276	***
	不安感	-.054		.462	***	-.097		.337	***
愛着行動	安定	.345	***	-.124	*	.269	***	-.055	
	依存	.125	*	.126	*	.126	*	.072	
	抵抗	.043		.260	***	.040		.278	***
家庭内コミュニケーション	家族間	.278	***	-.060		.351	***	-.184	**
	夫婦間	.157	**	.052		.410	***	-.319	***
育児経験	中高時代	.038		-.129	*	.150	*	-.007	
	第一子前	.037		-.149	*	.037		-.035	

n=288		父子間共感				夫から見た夫婦間共感			
		共有		分離		共有		分離	
育児感情	充実感	.523	***	-.307	***	.511	***	-.322	***
	不安感	-.128	*	.436	***	-.126	*	.449	***
愛着行動	安定	.493	***	-.135	*	.482	***	-.181	**
	依存	.301	***	.001		.161	**	.081	
	抵抗	.025		.252	***	.030		.238	***
家庭内コミュニケーション	家族間	.252	***	-.098		.317	***	-.245	***
	夫婦間	.306	***	-.145	*	.407	***	-.469	***
育児経験	中高時代	.136	*	-.125	*	.068		-.148	*
	第一子前	.144	*	-.107		.067		-.129	*

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

点、多い選択肢を3点、その中間を2点と得点化し、母親（妻）と父親（夫）ごとに17項目での項目－全体相関を計算した。有意に達しなかった3項目を削除し、残った14項目で主因子法による因子分析を行った結果、母親と父親で共通する2つの因子が見出された。ひとつは日常的な家族との会話を示す因子であり、もうひとつは夫婦間での会話や気づかいに関係した因子であった。それぞれ「家族間コミュニケーション」因子、「夫婦間コミュニケーション」因子と命名した。それぞれの因子に対応した項目の平均値を尺度得点とした。**表4**にあるように、尺度の内部一貫性は十分高いことが示された。

表6の平均値から、母親（妻）は、家族に対しても夫に対しても、言葉をかけたり意思を伝えたりすることが多いこと、つまりコミュニケーションの程度が高いことが示された。

⑤育児経験

「ない」を1点、「多い」を4点と得点化し、2つの時期ごとに因子分析をした結果、母親と父親とも、5項目の育児経験は一因子構造であることが確かめられた。5項目の平均値を尺度得点（1点～4点）とした。**表5**のα係数は内部一貫性がきわめて高いことを示している。

母親は父親よりもわずかに育児経験を多く持っていた。しかし、全体的に見て、母親も父親も自分の子どもを持つ以前にほとんど育児経験のないことが示された（**表6**）。

2）家族共感と他の家族要因との関連

①父母（夫婦）間の相関

表7は親子間共感と夫婦間共感との相関関係を示している。母親（妻）と父親（夫）のいずれにおいても、子どもとの共有経験と夫婦間での共有経験、および子どもとの分離経験と夫婦間での分離経験との間に有意なプラスの相関のあることが認められた。また、相関係数の程度を見ると、母親（妻）よりも父親（夫）の方がそれらの関連性は強いことが認められる。この結果は首藤（1997）の知見とも一致している。つまり、母親（妻）は父親（夫）よりも、親子関係と夫婦関係を区別する意識が強いことを示唆している。換言すれば、母親（妻）よりも父親（夫）において、親子関係の満足感が夫婦関係のよさとつながる傾向が強い。

なお、表には示されていないが、母子間の共感経験の各側面は父子間でのそれと対応する側面と弱いながらも有意に相関していた。この関係は夫婦間共感においても認められた。これは、家族間の気持ちの交流としての共感関係の一端を示すものと思われる。

②家族共感と他の家族要因と相関

表8は、家族共感と他の家族要因との相関関係を示している。母親と父親のいずれにおいても、子どもとの共有経験は育児の充実感および家庭内コミュニケーションの程度とプラスに相関していた。また子どもとの共有経験は子どもの安定した愛着行動と依存的な行動とプラスに相関していた。母親と父親のいずれにおいても、子どもとの分離経験は、育児の充実感とはマイナスに、不安感とはプラスに相関していた。さらに、子どもとの分離経験は子どもの不安定な愛着（抵抗）とプラスに相関していた。

親になる以前の育児経験との関係を見ると、父親において、育児経験は子どもとの共有経験と弱いながらも有意に相関していた。母親においては、育児経験は子どもとの分離経験と弱いながらもマイナス方向に有意に相関していた。父母で関係のパターンは異なるものの、親の準備期間での育児経験は、親になってからの子どもとの共感関係に何らかの影響を持つことが示唆される。

夫婦間共感と育児感情、愛着行動、および家庭内コミュニケーションとの相関関係は、親子間共感でのパターンと類似していた。多少異なるパターンは家庭内コミュニケーションにおいて見出された。つまり、妻と夫のいずれにおいても、コミュニケーションの程度は夫婦間の共有経験とはプラスに、分離経験とはマイナスに相関していた。

全体的に見ると、家族との感情の共有経験は、育児の充実感、子どもの安定した愛着行動、家族とのコミュニケーションの多さと関連し、分離経験は育児の不安感、子どもの不安定な愛着行動、コミュニケーションの少なさと関連していた。これらの結果は、家族の感情交流が、育児場面、会話場面、子どもの行動などの家庭生活の様々な局面と関連していることを示している。また、相関係数は強くても中程度のものであり、家族共感の測定が、内容的に妥当なものであり、また他の測定と並存する意義があり、さらに基準との関連性からも有効であることを示している。

3）家庭の感情的風土としての共感関係

母親（妻）と父親（夫）のいずれにおいても、親子間共感と夫婦間共感は意味ある関係性を示していた。また、親子間においても夫婦間においても、母親（妻）と父親（夫）の共感経験は弱いながらも有意な関係を示していた。これらの結果は、家庭の中にある一貫した感情交流のパターンのあることを示唆している。これを確かめるために、母子間共

感、父子間共感、妻と夫から見た夫婦間共感の合計8つの尺度得点を主因子法による因子分析にかけた。固有値1以上の3つの因子が認められた。表9はバリマックス回転後の因子負荷量を示している。

表9　家族共感得点に関する因子分析結果

(バリマックス回転後の因子負荷量　n=302

		因子1	因子2	因子3
母子間共感	共有	.040	-.001	***.795***
	分離	.251	***.765***	.014
妻から見た夫婦間共感	共有	.237	-.090	***.800***
	分離	-.122	***.682***	***-.316***
父子間共感	共有	***.839***	.095	.147
	分離	***-.386***	***.524***	.225
夫から見た夫婦間共感	共有	***.818***	.007	.166
	分離	***-.580***	***.478***	.025
	説明済	1.995	1.571	1.473
	寄与率	.249	.196	.184

因子1では、父子間および夫から見た夫婦間での共有経験（プラス）と分離経験（マイナス）の負荷が高い。因子2では、母子間と妻から見た夫婦間での共有経験の負荷（プラス）が高い。これから、因子1は父親（夫）の意識を通した家族の一体感を示し、因子3は母親（妻）の意識を通した家族の一体感を示していると考えられる。一方、因子2では、母子間、妻から見た夫婦間、父子間、それに夫から見た夫婦間での分離経験の負荷が高い。因子2は家族の感情的な分離感を示していると考えることができる。

因子2が見出されたことは、家庭の中に空気のように存在する感情的な雰囲気もしくは風土が存在し、それは本研究で用いられた共感関係の測定からをとらえ得ることを示唆している。

■ 研究　2

1．目　的

思いやりも正義感も対人場面で自己制御された行動である。行動上は思いやり行動あるいは正当な自己主張という形で表現されることがあるものの、それらの心理的な過程を含めて直接観察することは難しい。そこで、研究2では、日常的に幼児と生活を共にしている保育者の観察を通して、思いやりと正義感を含んだ対人行動の発達を測定する。そして、家族関係が集団生活場面での対人行動とどのような関連にあるのかを検討する。

研究1の結果に基づき、家族要因として、母子間と父子間での共感経験を取り上げた。子どもの思いやりと正義感の発達には、子どもが自己とは異なる社会的世界と遭遇し、自己と社会を協調させる機会が必要になる。一般的には対人場面での葛藤経験がこのような機会を提供することになる。家庭においてはしつけを要する場面がこれに相当すると考えられる。そこで、本研究では、しつけを要する子どもの行為に対する親のしつけの態度を家族要因に含めることにした。具体的には、子どもの行為に対して、母親と父親がどの程度子どもに自己制御を求めるしつけを行うかを調査した。

2．方　法

1）調査対象者

埼玉県大宮市の4つの公立保育所の3歳児以上の幼児274名（女子136名、男子138名）が調査に協力した（研究1の保育所とは別）。平均月齢は60.4ヶ月であった。保護者対象の調査に協力した保育所を通して、幼児の保護者に調査用冊子が配付された。冊子は母親用と父親用を1セットとし、合計180部配付した。回収率は56.7%（102部）であった。したがって、対人行動調査の分析は274名の幼児、対人行動と家族要因の関係の分析は102名の幼児とその両親を対象にした。対人行動の評定者となった保育者は15名であり、平均勤続年数は12年（5年～24年）であった。

回答用紙には欠損値があるため、分析の対象者数は上記の数とは一致しない。

2）調査項目

①幼児の対人行動調査

幼児の対人行動に関する25項目が作成された。それぞれの項目は、対人場面での自己主張的（表出的）な振る舞い、自己抑制的な行動、共感、思いやり行動、感情の制御、自己制御を欠いた行動に関する内容であった。表10は、尺度構成に使われた19項目を示している。保育者は担任する個々の幼児についてそれぞれの項目ごとに「きわめて少ない」から「頻繁に見られる」までの5段階で評定を行った。

②家族関係調査

親子間共感に関する15項目（研究1と同様）と、親のしつけに関する7項目が用意された。7種類のしつけ場面（表11）について、はみ出しを許容するかかわり方と、社会の決まりや親の期待を伝えそれに従うように行動を変えたり制止したりするかかわり方（自己制御促進的な態度）の両極端の選択肢を示し、その中間的な2段階（選択肢は示されず評定値のみ）を含めた4段階で評定する形式を採用した。例えば、質問文「お子さんがゲームで一番

表１０　保育者から見た幼児の対人行動に関する質問項目

n=274

尺度名	α係数	質問項目
表出的協調	.854	友だちが困っているとき、頼まれなくても自分から進んで助ける(手伝う)。
		悲しい気持ちやくやしい気持ちを隠さず伝える。(無理な抑制をしない)
		友だちが悲しんでいると、気にかけたり、同情したりする。
		うれしいことがあると、他の子や先生に話したがる。
		危ない遊びや悪いことをしている友だちに注意する。
		遊び相手と満足感、達成感を共有する。
		進んで小さい子や弱い子のめんどうをみる。
		いやなことやははっきり「いや」「ダメ」と言う。
		遊び相手と失敗した悔しさ、悲しみを共有する。
		他の子と自分の意見が合わないとき、自分の考えやアイディアを言う。
抑制的協調	.814	遊具を何人かの子とかわりばんこに使う。(自分の順番を待つ。)
		他の子のものが欲しくても我慢する。
		他の子に自分の順番や使用中の道具を譲る。
		他の子と意見が違うとき、相手の意見を受け入れる。
		いけないことをして注意されたときは、それを素直に受け入れる。
利己・混乱	.765	相手の嫌がることをわざとする。
		相手のことを考えない衝動的な行動をする(強引に物を奪う，一方的にひきこもるなど)。
		保育者が見ていないところで、ずるいことをする。
		いったん機嫌が悪くなると、なかなか直らない。

※評定は５段階

表１１　子どもの自己制御を促すしつけに関する質問項目

n=120

尺度名	質問項目
子どもの自己制御を促すしつけ	お子さんがゲームで一番になりたくて、わざとずるいことをしたとき、あなたは
	お子さんが、バスや電車の中で感動の喜びを大きな声で話してきたとき
	お子さんが、くやしくてあなたに八つ当たりを(たたいたり、けったり)してきたとき、あなたは
	お子さんがブロックや積木で苦労して作り上げたものを片付けるのがいやで泣いているとき、あなたは
	お子さんが注意不足からジュースをこぼしたとき、あなたは
	お子さんが、叱られたくなくてうそを言ったとき、あなたは
	お子さんが、何かに失敗して泣いているとき、あなたは

※選択肢は子どもの心情を全面的に受容する「許容的」な態度から、社会の決まりや親の期待を言及し子どもの行動を制止（方向転換）しようとする「自己制御」促進的態度までの４段階にわかれていた。得点は７場面の中から自己制御促進的な態度を選択した数である。

になりたくて、わざとずるいことをした時、あなたは」－選択肢「一番になりたい気持ちをわかってあげる」（許容）と「ルールを守ることの大切さを教える」(自己制御)、質問文「お子さんがなにかに失敗して泣いているとき」－選択肢「失敗したくやしさや悲しみを分かってあげる」（許容）と「もう一度チャレンジするように励ます」（自己制御)。

３）手続き

対人行動の調査票は保育所ごとに配付され、研究者から全体的な教示を受けた後、保育者ごとに評定作業にはいった。評定基準の変動をなくすために、各保育者は3日以内で担当幼児分を評定し終えるように要請された。保護者への質問票は各保育所を通して配付され、約10日後に回収された。回収の際、プライバシー保護の目的から、母親用と父親用の質問票を別々の封筒にのり付けをして回収できるような配慮がなされた。

３．結果と考察

１）尺度の構成

①家族共感

研究１と同様の手続きを通して、母子間と父子間

それぞれの共有経験得点と分離経験得点を計算した。

②幼児の対人行動

まず、「きわめて少ない」を1点、「頻繁に見られる」を5点と得点化した。次に、20項目を次に示す2種類の尺度に分類した。対人場面での自己主張的な行動と抑制的な行動、および共感と思いやり行動に関する15項目、利己的行動と未熟な感情制御に関する5項目である。最初の15項目について、項目－全体相関を計算し、すべての項目で有意に達することを確認した。そして、主因子法による因子分析を行い、固有値1以上の因子2つを抽出した。バリマックス回転後の負荷量のパターンから、因子に対応する尺度を構成した。因子1には、思いやりを積極的に表現しようとする行動、自分の感情や考えの素直な表現、遊び場面での仲間との感情の交流に関連した項目の負荷が高かった。そこで因子1を自己主張的な自己制御が強く作用した協調的な対人行動の因子であると考え、「表出的協調」と命名した。因子2は、自分の要求を抑制した思いやり行動と他者の意見や考えの受容に関連する項目の負荷が高いことから、自己抑制的な制御の作用した対人行動の因子であると考え、「抑制的協調」と命名した。残りの5項目について、項目－全体相関を計算し、有意に達した4項目を因子分析にかけた。その結果、1因子であることが確認され、「利己・混乱」因子と命名した。

それぞれの因子に対応する項目の平均値を尺度得点とした。各尺度の内部一貫性は十分高いことが示された（表10）。

尺度得点の年齢差と性差を検定するために、幼児を年齢別のクラスに応じて、4歳児クラス以下の幼児と5歳児クラス以上の幼児とに分類した。そして、各尺度得点について、2（年齢）×2（性）の分散分析を行った。その結果、表出的協調（$F(1, 255)=7.494$, $p<.01$）と抑制的協調（$F(1, 266)=10.405$, $p<.001$）では年長児の方が有意に高いことが示された。また、抑制的協調（$F(1, 266)=12.702$, $p<.001$）は女子の方が有意に高く、利己・混乱（$F(1, 270)=10.388$, $p<.001$）では男子の方が有意に高いことが見出された。図1は年齢と性ごとの尺度得点の平均値を示している。

③しつけの態度

4段階の評定のうち、自己制御促進的な態度に近い2つの評定値のいずれかを選択した場合、1点と得点化した。7場面を通した合計得点を尺度得点とした（0点～7点）。母親と父親の得点を比較すると、母親（$M=4.33$, $SD=1.48$）よりも父親（$M=4.94$, $SD=1.51$）の方が自己制御を求めるかかわり方の強いことが示された（$t(96)=3.338$, $p<.01$）。また、母親と父親の得点について、2（年齢）×2（性）の分散分析を行った結果、母親の得点だけで年齢の主効果が有意になった（$F(1, 92)=3.74$, $p<.06$）。図2のように、年長の幼児の母親はより自己制御促進的なしつけの態度をとる傾向が認められた。

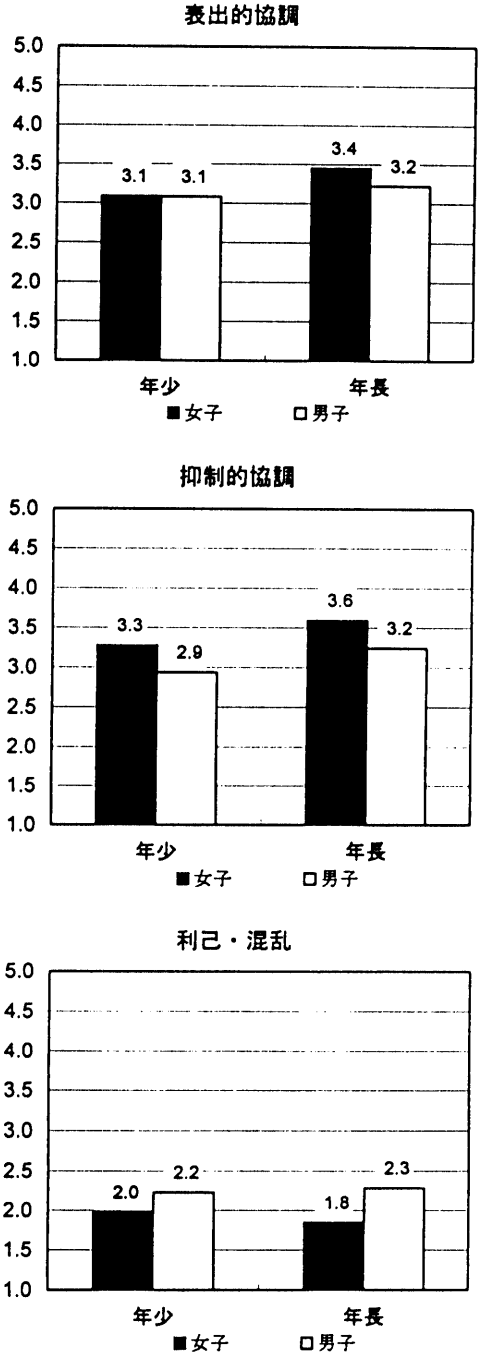

図1　保育者から見た幼児の対人行動の平均値

2）幼児の対人行動と関連する家族要因

幼児の対人行動と家族要因との関係を分析するために、まず単純な相関係数を計算した。表12は、

表１２　幼児の対人行動と家族要因との相関

女子 n=40		幼児の対人行動		
		表出的協調	抑制的協調	利己・混乱
母子間共感	共有	-.106	-.322 *	.185
	分離	.044	.011	-.198
父子間共感	共有	.014	-.452 **	.124
	分離	-.114	.080	-.074
自己制御のしつけ	母親	-.095	-.087	.052
	父親	-.082	.240	-.218
男子 n=42		**幼児の対人行動**		
		表出的協調	**抑制的協調**	**利己・混乱**
母子間共感	共有	-.194	-.290 +	.005
	分離	-.161	-.241	.138
父子間共感	共有	-.128	-.222	.182
	分離	-.003	-.025	.366 *
自己制御のしつけ	母親	.121	-.075	.342 *
	父親	.258 +	.257 +	-.189

*+ p<.1　* p<.05　** p<.01　*** p<.001*

対人行動に関する3つの得点と、親子間共感および自己制御のしつけに関する得点との相関係数を男女別に示している。全体的に見て、幼児の対人行動と親子間共感および自己制御のしつけとの相関は、幼児の性と親の性の組み合わせによって異なっている。女子の表出的協調と利己・混乱は、どの得点とも有意な関係を示さなかった。一方、女子の抑制的協調は、母子間と父子間での共有経験と有意にマイナスに相関していた。男子の表出的協調と抑制的協調は父親の自己制御のしつけとプラスに相関する傾向が認められた。男子の抑制的協調は、母子間での共有経験とマイナスに相関する傾向も認められた。男子の利己・混乱は父子間での分離経験と母親の自己制御のしつけとプラスに相関していた。

次に、親子での共感経験と親のしつけの態度が幼児の集団生活場面での対人行動に影響するという因果関係を想定し、重回帰分析を行った。**表13**は、幼児の月齢、共感関係に関する4つの得点、および自己制御のしつけに関する２つの得点を独立変数とし、対人行動に関する3つの得点のそれぞれを従属変数とした重回帰分析での標準偏回帰係数（β係数）を示している。女子の表出的協調には共感としつけに関するどの要因も有意に影響していない。女子の抑制的協調には父子間での共有経験がマイナスに寄与する傾向が認められた。女子の利己・混乱では重相関係数が有意に達しなかった。

男子の表出的協調には父親の自己制御のしつけが有意に寄与する傾向が認められたが、全体としての重相関係数は有意に達しなかった。男子の抑制的協調には、母子間での共有経験がマイナスに寄与していた。また、母親の自己制御のしつけもマイナスに寄与し、逆に父親の自己制御のしつけはプラスに寄与する傾向が認められた。男子の利己・混乱には、父子間での分離経験と母親の自己制御のしつけがプラスに寄与していた。また、父親の自己制御のしつけはマイナスに寄与していた。

男女で共通に見られたパターンは、表出的協調には親子間共感がほとんど影響していなかったことである。積極的な思いやり行動と正義感に基づく主張的行動は表出的協調因子に含まれていた。これは、家庭での親子の感情交流と親のしつけ方は、子どもの集団生活場面での思いやりと正義感に直結するのではないことを示唆している。子どもは仲間や保育者との葛藤経験やその解決経験を積む中で、自己主張的な対人行動スキルを獲得すると考えられる。親子の共感関係や親の自己制御のしつけは、子どもの対人行動ではなく、対人場面に参加する子どもの態度と関係するのかもしれない。

男女で異なったパターンも見出された。まず、女子の抑制的協調には父子間での共有経験がマイナスに寄与していたのに対し、男子の抑制的協調には母子間での共有経験がマイナスに寄与していた。

表１３　幼児の対人行動を従属変数、家族要因を独立変数とした重回帰分析の結果

女子 n=40			幼児の対人行動 表出的協調	抑制的協調	利己・混乱
重相関係数			R=.572 p<.06	R=.570 p<.06	R=.405 n.s.
独立変数	月齢		.564 **	.290 +	.081
	母子間共感	共有	-.188	-.245	.149
		分離	.006	.006	-.299 +
	父子間共感	共有	.064	-.343 +	-.102
		分離	.020	.102	.003
	自己制御のしつけ	母親	-.143	-.078	.117
		父親	-.199	-.037	-.372 +

男子 n=42			幼児の対人行動 表出的協調	抑制的協調	利己・混乱
重相関係数			R=.516 n.s.	R=.642 p<.01	R=625 p<.05
独立変数	月齢		.300 +	.323 *	-.105
	母子間共感	共有	-.100	-.297 *	.053
		分離	-.254	-.249	-.057
	父子間共感	共有	-.019	-.114	.088
		分離	-.028	.019	.390 *
	自己制御のしつけ	母親	.019	-.281 +	.467 **
		父親	.330 +	.363 *	-.421 *

+ p<.1　* p<.05　** p<.01　*** p<.001

つまり、父親が娘の心情を共有する経験は娘の自己抑制的な対人行動を弱め、母親が息子の心情を共有する経験は息子の自己抑制的な対人行動を弱めるという結果である。親が子どもとの関係の中で共有経験を多く持つと意識する背景には、実際の家庭生活の中でも、子どもの心情を理解し行動を受容しようとする養育環境があると考えられる。親の共感的なかかわり方は子どもの思いやりの発達にとって必要であると思われる。しかし、少なくとも本研究の結果は、子どもの抑制的な対人行動が、異性の親との一体感の環境からは獲得されないことを示している。

母親と息子の同様な関係は、自己制御のしつけについても見出された。母親の自己制御のしつけは息子の抑制的な対人行動を弱め、利己的あるいは制御を欠いた行動を強めていた。逆に、父親の自己制御のしつけは息子の抑制的な行動を高め、利己的な行動を弱めていた。これらの結果は、息子の自己制御の獲得にとって、父親が社会的ルールを提示したり、子どもを励ましたり、諭したりする環境が必要であることを示している。逆に、母親がこのような環境を作り出すことは、逆効果であることも示している。これは、父親を道具的役割、母親を情緒的役割と見なす古典的な性役割の考えと一致する方向にある。しかし、男子だけで見られた関係であること、情緒的役割のひとつである母親の共有経験は男子の抑制的な行動を弱める結果も見られたことを考慮すると、親子関係と子どもの対人行動との関係性は古典的な性役割の見解に示されているほどには単純なものではないと思われる。

■　まとめと今後の課題

本研究は、共感経験から家族関係をとらえる試みを発展させ、家族の感情交流が育児場面、会話場面、子どもの愛着行動などの家庭生活の様々な局面と関連することを報告した。そして、それぞれの家庭には感情的な雰囲気が存在し、家族の共感関係を把握することにより、その感情的な風土をとらえ得ることを示した。

幼児の思いやりと正義感を自己制御された対人行動と見なし、それを保育者の観察を通して測定した。そして、親子の共感関係と親のしつけの態度は、幼児の対人行動とどのように関連するのかを

分析した。親が単にやさしくすれば思いやりが育つのではなく、逆に厳しく接すれば正義感が獲得されるのでもない。親の性と子どもの性によって、同じ家族要因が幼児の対人行動と異なった関係を示すことを報告した。そして、男子にとって、父親の共感と自己制御のしつけが重要になることを示した。

本研究の結果は、幼児期の思いやりと正義感の発達に関する心理学的知見を提供するだけでなく、保育所等において子育て相談など家庭と保育所との連携に関する仕事に携わる保育者にとっての基礎的資料にもなるであろう。

今後は、本研究の調査結果を踏まえ、実際の家庭の中での親子の間やきょうだい間での葛藤場面を観察し、どのような場面でどのような対立が起き、どのように解決されていくのかといった文脈をとらえる必要がある。この対人間の葛藤の文脈は、子どもの思いやりと正義感の発達環境として機能すると考えられる。その文脈の中で親は子どもにどのような期待や規範を伝えようとするのか、子どもは文脈の中でどのような意味を感じ取っていくのかを分析する必要がある。また、保育所での仲間間および保育者との葛藤場面についても同様な検討を加える必要がある。

参考文献

1)首藤敏元　1995　幼児の向社会的行動と自己主張－自己抑制　発達臨床心理学研究(筑波大学心理学系)，7, 77-86.

2)首藤敏元　1997　乳幼児の思いやり行動と家族の共感関係の検討　厚生省心身障害研究　効果的な親子のメンタルケアに関する研究（平成８年度研究報告書），255-261.

3)首藤敏元・馬場康宏・鈴木亮子　1993　母親の愛着スタイルと育児感情に関する研究　発達臨床心理学研究（筑波大学心理学系），5, 29-37.

4)首藤敏元・利根川智子　1994　幼児期における母子の愛着スタイルと子どもの社会的コンピテンス　発達臨床心理学研究（筑波大学心理学系），Vol.6, 29-42.

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨　本研究は、家庭内の人間関係と、幼児の思いやりおよび正義感の発達との関連を検討することを目的とした。研究１では、親子間と夫婦間での共感経験から家族関係をとらえ、家族の感情交流が育児場面、会話場面、子どもの愛着行動などの家庭生活の様々な局面と関連することを報告した。そして、それぞれの家庭には感情的な雰囲気が存在し、家族の共感関係を把握することにより、その感情的な風土をとらえ得ることを示した。研究２では、幼児の思いやりと正義感を自己制御された対人行動と見なし、それを保育者の観察を通して測定した。親子の共感関係と親のしつけの態度は、主に幼児の自己抑制的な協調的行動と関連していた。また、男子にとって、父親の共感と自己制御のしつけが重要になることを示した。